緑の地球　第162号　2015年3月15日発行　年6回・奇数月15日発行　発行：認定特定非営利活動法人　緑の地球ネットワーク
年間購読料2,000円（送料含む）定価300円　〒552-0012大阪市港区市岡1丁目4-24 住宅情報ビル5F　TEL. 06-6576-6181　FAX. 06-6576-6182
郵便振替　00940-2-128465　E-MAIL：gentree＠s4.dion.ne.jp　URL（ホームページ）：http://homepage3.nifty.com/gentree/

緑の地球
GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

大同県徐疃郷（旧）
1996年8月撮影

1993年に植えたマツが2014年12月には浸食谷が隠れるほど育った。奥には北京の水源でもある冊田ダムが見える

Contents

●緑の地球ネットワーク第21回会員総会のお知らせ　……　Ｐ２
●黄金崎の松・再生プロジェクト、自然と親しむ会報告　…　Ｐ３
●アブラマツの苗をあえてそのまま植えてみた　……　Ｐ４～５
●西伊豆５月合宿、津波被災地海岸林再生に協力しましょう　Ｐ６

2015.3
162

認定特定非営利活動法人　緑の地球ネットワーク

GENに参加するには　☆会員・会報購読者になる　☆自然と親しむ会・講演会・報告会・学習会に参加する　☆ワーキングツアーに参加する
☆ビデオ『よみがえる森』を見る　☆書き損じハガキ・古切手を集めて送るetc.　★あなたのご参加を待っています！

緑の地球ネットワーク 第21回会員総会のお知らせ

緑の地球ネットワークの活動は今年で23年となりますが、大同のプロジェクトはこれまでと同じように続けていくのは難しく、今後の活動をどう進めるかみなさんと一緒に考えていく必要があります。

国内活動においては関東ブランチが協力している西伊豆宇久須での活動や、東北の津波被災地の海岸林再生事業の参加など新たな動きがあります。GENが大同でおこなってきた緑化の経験を日本でどのように生かしていけるでしょうか。このような話を直接聞いていただける機会ですのでぜひ総会にご参加ください。

【緑の地球ネットワーク 第21回会員総会】

○日時：6月13日（土）13時30分～16時40分
○記念講演：13時30分～15時
◇講師：調整中です
○会員総会：15時20分～16時40分
○場所：大阪市立阿倍野市民学習センター講堂（大阪市阿倍野区阿倍野筋3-10-1-300 あべのベルタ3階　tel.06-6634-7951 地下鉄谷町線「阿倍野」駅すぐ、JR／地下鉄「天王寺」駅、近鉄「大阪阿倍野橋」駅徒歩8分）
○総会終了後に懇親会を予定しています。

切手、ハガキ、外国コイン等ご寄付に感謝

記念切手のコレクションをしていた会員やご家族から事務所では使いきれないほどの未使用切手をご寄付いただいたので売却したところ、132,275円になりました。

書き損じハガキは郵便局で切手等と交換していますが、今年度交換分が132,220円相当になっています。やはり事務所では使いきれないので一部換金を予定しています。

2014年4月から今年1月までにお送りいただいた古切手・外国コイン等を売却した金額が30,421円になりました。ご協力ありがとうございます。

そのほか、商品券、未使用の図書カード、QUOカードなども現金化して運営の助けとさせていただいています。お手元に眠っているものがありましたら、GEN事務所までお送りください。

黄土高原ワーキングツアー 今年は催行します

毎年春におこなう黄土高原ワーキングツアー、昨年は参加者が集まらず中止となりましたが、今年はおかげさまで一定の人数が集まりましたので催行する運びとなりました。

すこし遅めの4月11日に出発し、植樹や村の人との交流など大同の春を満喫してきます。アンズの花が楽しめるかも。ツアーのようすは次号でご報告します。

いますぐできるＧＥＮへの協力

■会員の輪をひろげよう！

緑の地球ネットワーク会費（年額）

一般会員	12,000円
家族会員（同居の家族2人目から）	6,000円
学生会員	3,000円
ジュニア会員（中学生以下　）	1,000円
団体会員	12,000円
賛助会員	100,000円

※会費は会報購読料を含んでいます。

■会報を購読してください！

GENの活動に関心はあるけれど会員になるのはちょっと、という方は、会報『緑の地球』を購読してみませんか。年間購読料2,000円。

■緑化基金、運営カンパもとむ

金額は自由です。GENへの寄付は、寄付控除の対象となります。現在、運営資金が不足しています。また、緑化基金、運営カンパの別を問わない使途自由のご寄付も受け付けます。その場合、必要に応じて使わせていただきます。

＊緑化基金の20%は事務管理費になります。

■絵はがき『黄土高原の花』

8枚組・300円（送料別途。5セット以上送料無料）

■書き損じはがきを集めています

書き損じはがき、古い未使用のはがきを集めています。郵便局で切手等に交換します。

■未使用切手・古切手を集めています

普通切手、記念切手、外国切手なんでもOK。周囲を1cmほど残して切り取ってお送りください。未使用切手も大歓迎です。

■外国コイン・商品券など回収中

使うあてのない図書券、文具券、各種商品券、外国コインがありましたらお送りください。

■ボランティア募集

会報発送や事務所の手伝いなどのボランティアを随時募集しています。ボランティア可能な曜日、時間帯をご連絡ください。来ていただきたいときにGEN事務所から連絡します。

【GENへの寄付は税制上の優遇措置を受けられます】

緑の地球ネットワークは大阪市に認定された認定NPO法人です（期限は2019年4月8日まで）。

GENへの寄付は、所得控除あるいは税額控除を受けられます。対象となるのは2,000円を超える寄付金で、確定申告が必要です。

企業（法人）からの寄付金は、一般寄付金の損金算入限度額とは別枠の損金算入限度額が認められています。

また個人が相続または遺贈により取得した財産を、相続税の申告期限以前に認定NPO法人に寄付すると、相続税の課税対象から除外されます。

GENの場合寄付金となるのは、緑化基金・運営カンパ、おまかせカンパと会費のうち1口を超える部分、賛助会費から12,000円をひいた金額です。

また、大阪市民のかたは市民税控除を受けることができます。くわしくはGENまでお問い合わせください。

報告 第2回黄金崎の松・再生プロジェクト

宮本　敏幸（GEN会員）

2月19日～22日、西伊豆町で国際ボランティア学生協会（IVUSA）の100名を越える学生ボランティアが合宿をおこない、GEN会員も参加しました。

昨年に続き、「黄金崎の松・再生プロジェクト」に4名で参加した。

19日昼、柴公民館に集合し、藤原國雄さんの、炭を使った菌根菌利用のマツ再生法の説明の後、黄金崎に移動し、炭の材料を集めた。急坂をものともしない国際ボランティア学生協会（IVUSA）の若者100名余の頑張り＝圧巻のザ・フレコン（バケツ）リレーで、これでもかというくらいの大量の材料が集められた。

20日は、黄金崎での炭焼きと林床の整備とツワブキの移植、休耕田での炭焼き、千年の森での間伐材の搬出、大田子（おおたご）海岸での清掃の4隊に分かれ、わたしたちは黄金崎と休耕田での炭焼き。夕食後は、高見事務局長の黄土高原での炭と菌根菌を使ったマツの育苗と植林の活動報告。

21日は西伊豆町の役場の方、町おこし協議会の方、地元の農業高校の先生と生徒も参加して150名くらいで、一昨年の台風で塩をかぶり弱ってきている黄金崎のマツ林の再生を行なった。マツの根元の落葉かきを行い、穴を掘り、炭を入れ、ベニテングタケの胞子液をかけ、熔（よう）リンを少量まき、川砂で抑えをし、穴を埋戻し、目標の27本を上回る34本のマツの木を手当てした。

環境保護と地域活性化をめざすこの取組みは、IVUSAの若者のはつらつとした組織力と行動力や規律性と礼儀正しさはもとより、さまざまなことで裏方を務めていただいた地元の方がたの熱意・協力があってこそのプロジェクトである。

わたしたちは22日朝、現地を離れ帰路に就いたが、IVUSAの若者たちは西伊豆の町おこしのキャッチコピーのコンテストを行い、「西伊豆の夕日、あなたはだれと見たいですか？」が1位になったそうである。

私は即答する。「IVUSAの若者と」と。しばらくはテンション、マックス。

学生たちのザ・フレコン（バケツ）リレー

運営懇談会をおこないました

今年で第6回目の運営懇談会は1月10日（土）に東京で、1月17日（土）に大阪でおこないました。

東京会場では23名、大阪会場は17名が参加しました。

高見事務局長による大同の報告のあと、大同の現状のほか、国内での活動についてなど活発に議論が交わされました。

報告 有馬富士公園で冬の自然観察

川島　和義（GEN会員）

2月28日三田市の有馬富士公園でハイキングをおこない、11名が参加しました。お天気にも恵まれ、春の訪れを感じさせるたのしい1日となりました。

2月末で寒さが心配されたが、28日は幸いにして暖かい1日だった。

今回の行き先・有馬富士公園は、三田市にある兵庫県立公園とのこと。集合は新三田駅だったが、わたし（と配偶者）は自家用車で向かったので、公園の駐車場から合流させてもらった。待ち合わせた園内の福島大池にはカモやオオバンなどの水鳥が見られる。

前中代表の案内で植物を観察しながら、有馬富士へと向かった。ヒノキとそれに似たアスナロやサワラとの見分け方（葉の裏の文様の違い）などを教えてもらった。また、フジとヤマフジでは蔓の巻き方が反対であるが、右巻きと左巻きの見方は統一されていないとか、サンショウなどの刺は、動物にかじられるのを防ぐという役割を果たすが、刺のないものもあり、このような形態の発生（進化）は合目的的に行われているとは考えにくい。生物の進化は、色んな変化が現れ、その結果が不都合でなければ残る、と考えるのが妥当だと思う…などという話を聞かせてもらいながら山道を進んだ。

名前は忘れたが、幼少期には岩に貼り付いて成長する植物があった。貼り付くのは、葉の裏側に接着剤のようにベタベタした物質が分泌されるからで、根をおろしている訳ではないのだそうだ。

頂上広場で昼食をとったが、頂上はもっと上だった。せっかくだから標高374mの頂上を目指す。頂上近くになると傾斜がきつくなり、岩場が出てくる。登っていると三点確保という言葉が聞こえてくる。最近はほとんど意識していなかったが、山登りを始めた頃には、基本技術として教えてもらったのでなつかしい言葉だ。

帰路に、公園内の茅葺き民家を見学して1日を終えた。

アブラマツの苗をあえて袋のまま植えてみた
3年後　やはり成長が悪かった

前中　久行（GEN 代表）

大同の「緑の地球環境センター」で代表の前中久行 GEN 代表がマツの育苗実験をおこないました。3 年間の成長の推移をまとめましたので報告します。

大同での代表的な緑化植物は、かつては平坦地ではポプラ類、山地はマツ類であった。ここ 15 年程で、平坦地のある部分は市街地に変わり、その周辺部では深井戸が掘られ灌漑農地に、さらにその外縁部は収益の多いアンズ果樹園になって、ポプラの新規植栽は少なくなっている。GEN 直轄の場合は植物の多様性を求めて色々な樹種を試みている。地域の元来の植生であると思われるナラ類もようやく成長が確認できて、緑化の技術的目処が立ちつつある。

村々の緑化に GEN が協力する「地球環境林」では、かつては「成功するとは限らないから何を植えてもかまわないよ」というようなこともあったが、最近は「成功する可能性が高いから将来用材として役立つものを植える」ということで、マツへの要望がさらに強くなっている。

大同で緑化に使うマツ苗は、かつては苗床から掘り出した裸根苗だったが、最近では袋苗が多く使われている。移植の時に根を傷めることが少なく、移植の適期が広がり、また野ウサギが、囓ることができない大きな苗でも植えることができる。

2012 年春の植樹ツアーの時に村の担当者が、「苗の袋をそのまま埋める」と説明した。帰国後にわかったことだが、あちこちで同様の説明があり、ある団体では袋の取り扱いで論争して中国側と険悪な雰囲気になったそうだ。GEN では、以前から自らのプロジェクトでは袋を取り除くことを徹底してきた。水を通さず活着や成長によくないと考えるからだ。この経験以後は「そのまま埋める」と説明された場合は、通訳を通じてその発言を確認し、「植え穴に置いた後で、破ってはいけないのか」と聞きなおすことにしている。今まではいずれも「構わない」と返ってきている。もし「破ってはだめだ」と返っていた場合には、「それでは、作業の途中で破れた場合はどうするのか？」と聞く予定にしているが、まだそこまで至ったことはない。

写真１　実験されたさまざまな植え方、左から①②③④⑤本文参照

一般の村々では現地説明するのが緑化に詳しい人とは限らない。その日の当番者が適当に言っているのかもしれない。また、一般論としては通訳者が不正確に表現していることも多い。

2012 年夏のツアーの時の広霊県白羊峪林場では林場長が、「少なくとも袋の下部は確実に破るように」と指導していたので、専門家は袋のままがよいとは認識していない。ただし、各地での例があるので、「そのまま埋める」という通達や指導書があるのではないかと調べているが、今までのところ確認がとれていない。だれかの発言が、伝言ゲームさながら安易な楽な方向へ偏って伝えられているのかもしれない。

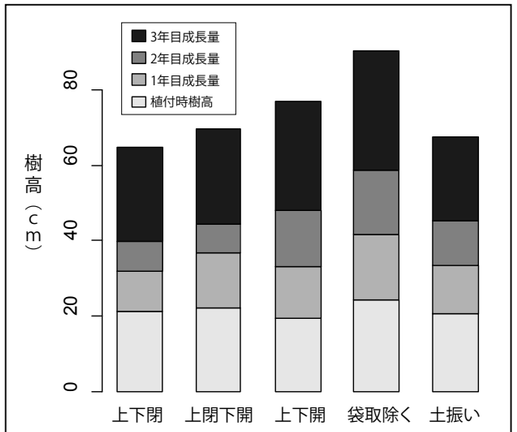
写真２　袋のまま植えた場合①の根の伸長状況

そこで、まずは事実にもとづいてということ、GEN の植え方の根拠をえるために、あえて袋のまま植えて、取り除いた場合との成長比較実験を行った。

場所は大同市にある GEN の「緑の地球環境センター」である。植え方として、①ポリ袋苗そのままで袋の上端も重ねて閉じる、②袋の底は切り開き上端は重ねて閉じる、③袋の底を切り開き上端はめくって開ける、④根土を残し袋は全て取り除く、⑤袋を取り除き土はふるい落として裸根にする、の 5 区分とした（写真 1）。

①②と③の違いは、土中を下に浸透する雨水が遮られるか袋の中を通過するかである。それぞれ 13 本を植えた。ポリ袋（18 cm × 12 cm、厚さ 0.01 mm、直径 4 mm の小孔が十数ケ所あり）で 2 年間養成したアブラマツ（平均樹高 22 cm）を植えた。植え付け直後に一度だけ十分に灌水した。その後は灌水しないよう関係者に強く伝えた（念押ししないと、老前の大事な松だから枯らさないようにとセッセと灌水してくれる恐れがある）。

植え付けは 2012 年 4 月末で、2014 年 8 月まで樹木の生存を確認し、樹高と幹根元直径などを測定した。最終的には切り取って、樹木の生育重を測定した。



マツ苗のポリ袋の取り扱いと植付け後の樹高成長量の関係

3 年間に枯れたのは、④で動物に喰われた 1 本、⑤で立ち枯れ 1 本 + 動物 1 本 + 人間による損傷 1 本だった。いずれの植え方も活着率が高く、袋の取り扱いによって差はなかった。袋のままはバンバン枯れてその害が明らかになると期待していたのだが、やってみないとわからないものだ。もちろん発芽前の適期に移植し、その直後は十分に灌水したこと、さらに、はじめの 2 年間は降雨の多かったという条件（外国人は気象データへのアクセスが許されず正確な降水量は不明）のもとでの結果である。

3 年間残った樹木についての毎年の平均樹高増加量（成長量）は、2012 年は小さい順に① 11 cm ⑤ 13 cm ③ 14 cm ② 15 cm ④ 18 cm、2013 年は① 8 cm ⑤ 12 cm ② 13 cm ③ 15 cm ④ 17 cm、2014 年は、⑤ 22 cm ① 25 cm ② 26 cm ③ 29 cm ④ 32 cm だった。

毎年の成長の結果として到達した 2014 年 8 月の樹高は、① 65 cm ⑤ 68 cm ② 75 cm ③ 77 cm ④ 90 cm だった。

年別の増加量についても、また 3 年後の樹高についても、④根土を残して袋を完全に取り去ったものが最も大きく、①袋そのままの成長が最も悪いことが確認できた。②と③はほぼ同じで中位の成長だった。底を破ることで、袋そのままより成長がよくなる。しかし根土を残して袋を完全に取り去ったものには及ばなかった。

実験終了時の地上部全体（幹＋枝＋葉）の重さ（生重）の平均は、① 365g ⑤ 525g ② 540g ③ 590g ④ 835g であった。大小順序は樹高と同じだが、④が飛び抜けてよく、⑤でさえ①の約 1.4 倍に達した。この測定作業をツアー参加の皆様にお手伝いいただいた（写真 3）。

実験終了時には、掘り上げて根の出方を観察した。ポリ袋はそのまま残っており、全個体で、袋あるいはそれに相当する範囲より外へ根が出ていた。外へ出た根のほとんどは袋の開口部や予め開いていた小孔を通過していた。皮膜面を突き破った可能性がある根も存在したが、袋のまま植えた①においても全根数に占める割合は 15% 程度であった（写真 2）。

写真３　ツアー参加の方がたにマツの重量を測定するための分解作業をお願いした

樹高と地上部重でみると、根土が落ちた場合も袋のままよりむしろ成長がよい。したがって、根土が落ちるのを懸念して袋そのまま植えるという選択には合理性がないことになる。

植穴掘り、植え付け、埋め戻しまでの植苗作業において、袋を丁寧に取り除くことで増加する手間は極々わずかなものだ。それがその後の成長に影響するのだから袋を完全に取り除くことが基本となる。ただ、根土を崩さずに袋を取り去り、植え穴の中で埋め戻すことは、初めての場合には意外に難しいのも事実だ。素手で作業する場合やカッターナイフを使う場合などを想定していくつかの方法の説明書を作っておきたい。

助成金が決まりました

公益財団法人イオン環境財団の 2014 年度第 24 回環境活動助成として 120 万円が決定しました。

大同市霊丘県の南天門自然植物園で多様性のある森林再生事業に役立てます。

予告　黄土高原スタディツアー

暑い日本を飛び出して初秋の黄土高原でカラリとした風を感じながら緑化活動に汗を流しましょう。

○日程：2015 年 8 月 29 日～ 9 月 4 日（6 泊 7 日）
○訪問地：中国山西省大同市（北京経由）
○費用：未定（昨年実績 一般 159,800 円、学生割引 20,000 円）
○定員：30 名程度

詳細は 5 月号でご案内します。

緑の地球ネットワーク年会費……一般会員＝ 12,000 円・家族会員＝ 6,000 円・学生会員＝ 3,000 円
ジュニア会員（中学生以下）＝ 1,000 円・団体会員＝ 12,000 円・賛助会員＝ 100,000 円◇会報購読のみ（年間）＝ 2,000 円

参加者募集

第７回 西伊豆５月合宿

西伊豆町では黄金崎の松林の再生の取り組みに100名以上が参加するなど地域創成の動きが芽を吹き始めています。今回の合宿では地元学セミナーをおこない、地域再生について考えます。

また、今年はペリー来航160周年。宇久須から車で1時間弱のところにある吉田松陰が宿泊した蓮台寺を訪れます。

○日程：5月15日（金）17時ごろ～17日（日）11時ごろ

※現地集合、現地解散。途中参加、途中離脱、後泊も可能です。事前にご相談ください。

▼15日（金）17時GEN関東ブランチ宇久須宿舎集合　18時カネジョウで自己紹介、夕食　21時宿舎にて懇親会

▼16日（土）第1再生休耕田景観ヒマワリの播種とヤーコンの定植、黄金崎のマツの観察と松葉かきなどの作業19時　地元学セミナー「地域再生」21時セミナー参加者と交流会

▼17日（日）9時　吉田松陰ゆかりの蓮台寺へ　11時現地解散。オプションで下田「黒船祭り」散策

○場所：静岡県賀茂郡西伊豆町宇久須

交通費は自己負担。以下は東京からの交通手段例です。

1）高速バス（新宿－修善寺）＋路線バス

2）JR東海道線（東京－三島）＋伊豆箱根鉄道＋路線バス約8,800円

3）自家用車（東名沼津インターから1時間半）駐車料金不要

中部、関西方面からは清水－土肥のフェリーを利用する方法もあります。

○参加費：大人8,000円　子供6,000円（宿舎管理費、光熱費、寝具、食費（酒代は別）1泊の場合は大人5,500円　子供4,000円。

○服装・持ち物：農作業・山歩き用の服装、帽子、雨具、軍手、洗面用具、筆記用具、ふとんシーツ（寝袋可）。

○問合せ・申込み：5月9日（土）までに氏名、性別、代表者の連絡先および合宿時使用の携帯電話番号をメールか郵便でお知らせください。

e-mail：matizukuri.college@gmail.com

〒171-8501 豊島区西池袋3-34-1　立教大学文学部　上田信

本の紹介

『橋本紘二写真集　雪国春耕　越後松之山　昭和の山村の記録』（橋本紘二著／農文協／3,600円＋税）

カメラマンの橋本紘二さんが1974年から4年余り、越後松之山の景色と農村の暮らしを撮った写真集。4月16日～22日に新宿御苑前のアイデムフォトギャラリー「シリウス」にて同写真展が開催されます。

参加者募集

津波被災地 海岸林再生に 協力しましょう！

東日本大震災・大津波から4年がたちました。復興が進み出したところ、そうでないところ、さまざまです。

名取市の「ゆりりん愛護会」は一昨年から海岸林再生に取り組んでいますが、2015年度のおおまかな活動計画が立ちました。私たちも協力したいと思います。以下は一般市民対象の計画です。

◆5月　マツ苗植樹（小塚原圃場）

◆9月12日（土）　マツ苗植樹（名取市七ヶ浜植栽地）

◆2016年2月　シンポジウム開催　場所：名取市

ショウロ菌接種によるマツ育苗苗とそれを活かした海岸林再生について考える公開討論会。マツ苗の育苗と海岸への植樹を実践している専門家と市民団体代表による活動報告。

◆2016年3月　マツ苗植樹（鳥の海植栽地）

緑の地球ネットワークは9月12日（土）午後の植林活動に参加し、13日（日）は津波による大きな被害を受けた名取市閖上（ゆりあげ）地区の見学をおこなう予定です。

詳しい案内は次号でおこないます。

参加者募集

GEN自然と親しむ会

渡し船で巡る大阪港とサクラ

4月サクラの季節、お花見をしながら大阪港周辺を散策してみませんか。

大阪市の運営する渡し船での移動や、日本一低い山、天保山に登ったり、なみはや大橋からの大阪港の景色を楽しんだりします。解散後、朝潮橋駅近くの八幡屋公園でのお花見も楽しめます。

○日時：4月4日（土）10時～15時ごろ

○場所：大阪市港区周辺

○集合：10時にJR桜島線「桜島」駅

○解散：地下鉄中央線「朝潮橋」駅

○案内：宮本敏幸さん（大阪市港区在住、GEN世話人）

○持ち物：弁当、飲み物、敷物、帽子、雨具、歩きやすい服装・靴

○参加費：300円（保険料を含む）

○定員：20名（先着順）

○問合せ・申込み：4月1日までにGEN事務局までに氏名、年齢、連絡先をお知らせください。

※小雨決行

黄土高原史話〈72〉

桑の実の熟す頃

谷口　義介（GEN会員）

今まであえて述べずにいたが、桑乾河という名の由来について、桑の実の熟す初夏のころ河が干上がるのでこの名がついた、という説がある。中国で権威のある『漢語大詞典』第四巻の「桑乾河」の項も、

伝承では、毎年、椹（桑の実）の熟すとき河の水が涸れるので、こう名付けられた。

としている。桑は6月ごろ紫色または黒色の集合果を結ぶが、はたしてこのころ桑乾河の流域は渇水期に入るのだろうか。

北京や大同を含めた北中国において、もっとも雨が降らないのが1～2月で、降雨量が最大になるのが7～8月。江南とちがって華北に梅雨の季節はないが、それでも6月といえば雨がしだいに多くなる時期だ。こう考えると、桑の実の熟す初夏のころ、毎年きまって水涸れするので桑乾河という名がついた、という説は怪しくなってくる。

じつは桑乾河のはるか下流、北京の西を流れる永定河の流域に、この定説の出所がありそうだ。

清・嘉慶年間（1796～1820）編纂の『永定河志』が、次のような詩を引いている。

今時は永定と名づくるも、古くは桑乾河と曰ふ。

歴伝に明徴あり、漲（増水）を卜するに曾て訛り無し。

桑の熟すとき必ず乾を致し、多少もそれ違ふこと弗し。

乾少なければ霖（長雨）必ず少なく、乾多ければ霖必ず多し。

この詩には注がついていて、「永定河流域では桑の実が熟すころ必ず数日の旱天があるが、その長・短によって、後にくる夏の雨量の大・小を占っている」、と。

そもそも、華北地方のなかでも北京小平原は年間の降雨量が500～600ミリと高くなっているが、それは西太平洋の高気圧が北上してきて、水分をじゅうぶん含んだ雲が北京の背後の太行山脈東端の燕山山脈にぶつかって、多くの雨を降らせるからだ。そして、その大半は夏季に集中し、そのため降り過ぎて洪水を起こす危険もあった。清の康熙帝は1698年、長い隄を築いて治水をこころみ、河の名前もそれまでの無定河（暴れ川）から永定河へと改めたが、それ以後も決壊・乱流をくり返し、大きな被害をもたらした。

それゆえ永定河の流域には、桑の実の熟すころの晴天の日数にもとづき、あらかじめ夏の雨量を予測する、という慣わしがあったのだ。ところが、こうした占いの慣行とはるか昔からあった「桑乾」河という字面が結びつけられた結果、『漢語大詞典』も採用するような俗説が生まれたのだろう。

ちなみに、永定河（無定河）はほんらい盧溝河とよばれていたが、フビライ＝ハーンが元朝の首都を大都（北京）に移した翌年の1275年、この地をおとずれたマルコ＝ポーロは、

カンバルック［北京］をたって［西］へ10マイル進むとプリサンギン［盧溝河］という大河に達する。この河は大海に通じており、莫大な商品を携えた多数の商人が船で往来している。この河にはとてもりっぱな石橋が架かっている。

（『東方見聞録』（1）第4章）

と述べている。厳密には、盧溝河＝永定河は下流の海河をへて海に通じていたというべきだが、それはともかくこの河は当時かなりの「大河」だったわけだ。

しかし今、川床には雑草が生い茂り、夏には緑色、冬には枯れて黄褐色を呈している。

第2回お祭りカンファレンス

ESDによる 持続可能な地域づくりを考える

昨年始まったお祭りカンファレンス、第2回目は立教大学ESD研究所とIVUSAが地域活性化の活動を行っている静岡県西伊豆町を取り上げ、「持続可能な地域づくり」のための協働のありかたについて考えます。

○日時：5月9日（土）13時～17時

○場所：立教大学池袋キャンパス太刀川記念館3階多目的ホール

○参加費：無料

○申込み：e-mail：omatsuri.conference@gmail.com

○問合せ：国際ボランティア学生協会（IVUSA）伊藤章（tel. / fax. 03-3418-1840　e-mail：ito@ivusa.com）

○登壇者：田中一明さん（内閣官房行政改革推進本部事務局企画官）／菅原由美子さん（菅原由美子観光計画研究所主宰）／長島司さん（西伊豆町役場企画防災課企画調整係長）／伊藤章さん（IVUSA理事）／平岩智行さん（神奈川大学3年生）／上田信さん（立教大学文学部教授、ESD研究所運営委員）

○主催：立教大学ESD研究所、国際ボランティア学生協会（IVUSA）

情報ひろば いろんなかたち

＊当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。
＊当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

NHKカルチャー京橋教室
野の道を歩く

野の道を歩いて自然を楽しんでみませんか。GEN代表の前中久行さんの案内で関西各地の野の道をあるいてまわります。

○日程：4月4日奈良県平郡町／5月16日奈良県大宇陀町森野旧薬園／6月20日兵庫県三田市相野／7月18日神戸市六甲森林植物園／9月19日滋賀県近江八幡市安土
○時間：10時～15時
○受講料：全5回　13,500円（体験（1回限り：2,500円＋税）ができます。詳しくはお問い合わせください）
○持ち物：弁当、飲み物、雨具、日よけ、動きやすい服装・靴
○問合せ・申込み：NHKカルチャー京橋教室（〒534-0024大阪市都島区東野田町2-9-7　K2ビル3F　tel. 06-6358-3377　fax. 06-6358-3322　URL http://www.nhk-cul.co.jp/school/kyobashi/

第91回東京財団フォーラム
中国の環境問題
環境ビジネスの現場から考える

急速な経済成長により、大気汚染問題や水質、土壌、廃棄物などあらゆる環境問題を抱える中国の環境問題とビジネス協力の可能性を探るフォーラムです。

○日程：2015年3月23日14時～15時30分（受付13時30分～）
○講師：劉強さん（中国物質再生協会常務副会長）、細田衛士さん（慶応義塾大学経済学部教授）、モデレーター：染野憲治さん（東京財団研究員）
○場所：日本財団ビル2階会議室
○定員：200名
○参加費：無料（事前登録必要）
○申込み：申込みフォーム http://s.tkfd.or.jp/1Fxabzd よりお申込みください。
○主催：公益財団法人 東京財団（〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル3F　tel. 03-6229-5504　fax. 03-6229-5508　http://www.tkfd.or.jp/）

土佐文旦
いかがですか

土佐の春の香りをお楽しみください。

◇土佐文旦

A	3.4L	5kg	6～9玉	4,200円
B	2L	5kg	10～11玉	3,700円
C	L	5kg	12～13玉	3,200円
D	M	5kg	14～15玉	2,700円

送料別途：関西650円、関東860円、北海道1,200円（20kgまで）10kg箱もあります。

○ご注文は下記まで
【田中農園】田中隆一
〒781-7412 高知県安芸郡東洋町河内203　tel./fax.0887-29-2500　e-mail: tanakan3@cronos.ocn.ne.jp
※売上げの一部を寄付していただいています。ご注文の際「GENの紹介」とひとこと添えてください。

編集後記

GEN事務局の河本です。ようやく寒い季節が終わりを告げ、春を感じられる季節になりました。

3月に入り、GEN事務所の「つるたま」こと大蒼角殿がぐんぐん成長しています。冬のあいだひたすら大人しくしていたかと思えば、「見て、見て！」と言わんばかりにするする芽をのばすつるたまくん、春が来たことをよろこんでいるように感じられ、見ている側もわくわくします。

一方で、この季節の悩ましい存在が花粉です。花粉症のわたしはそれなりに対策はしているものの、朝からくしゃみや目のかゆみが止まりません。いまでは「花粉症」は春の季語になってるんだとか。